



Title	翻訳序文に見る明治の英文学翻訳
Author(s)	佐藤, 美希
Citation	通訳研究 = Interpretation studies : The Journal of the Japan Association for Interpretation Studies, 6: 49-68
Issue Date	2006
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/35579">http://hdl.handle.net/2115/35579</a>
Type	article (author version)
File Information	sato-2.pdf



[Instructions for use](#)

# 翻訳序文に見る明治の英文学翻訳

佐藤 美希

The aim of this paper is to examine the relationship between Japanese translations of English literature, English literary studies, and socio-cultural current of thought in the Meiji era in Japan. Having been translated by academic researchers, the Japanese translations of English literature have apparently been governed by the academia of English literary studies. Also, the academia has been developed as an institutionalised system under Japan's ideology of striving for Westernisation.

In order to demonstrate how translations of English literature, English literary studies and socio-cultural aspects were intertwined with each other, this paper explores the following three steps: descriptions of the forewords of some Japanese translations from Shakespeare's works; analysis of how the concept of translation depicted in the forewords was closely associated with the development and the status of the English literary studies of the time; analysis of how the relationship between the translations and the academia was socio-culturally governed by the current of thought of the time. As a result of the analysis of the three steps, the paper aims to clarify the relationship between translations of English literature, English literary studies and socio-cultural current of thought.

## 1. はじめに

本稿の目的は、明治期における英文学の翻訳と当時の英文学研究及び時代・社会思潮との関連を明らかにすることである。

日本における英文学研究は明治の欧化及び近代化政策のもとで形成され、制度的に発展していく。明治 20 年に東京帝国大学の文科大学に英文科が設立されたのが英文学研究の制度的な出発点と考えられるが<sup>1</sup>、それ以前の明治 8 年には既に、東京開成学校（後の東京帝大）で外国人講師によってシェイクスピアを中心とした英文学講義が始まっており<sup>2</sup>、ここから日本における英文学研究の先達が生まれていった。一方、英文学作品の翻訳に目を移せば、この明治 8 年という年は仮名垣魯文が明治初の英文学作品の翻訳『<sup>はむれつと</sup>葉武列土』(シェイクスピアの *Hamlet* の日本語訳) を発表した年でもあり<sup>3</sup>、日本がその後膨大な数の英文学を翻訳し続ける歴史はここから始まったと

いえる。つまり、日本における英文学研究と英文学翻訳はこの明治8年を契機に、ともに並行して発展していったと考えられる。

この両者の発展の並行性と、その後現在に至るまで英文学研究者によって英文学作品が数多く翻訳されてきたことの2点を考えると、次の仮説が導かれる。すなわち、明治期には英文学研究が英文学翻訳の方向性を規定してきたのであり、さらに、この両者の関係もそれを取り巻く時代・社会思潮に規定されている、という仮説である。

この仮説について、本稿では以下の方法によって考察を進めていく。まず、英文学の翻訳テキストに付されている序文の内容を記述し、考察する。考察する翻訳序文として、『葉武列士』を筆頭に明治期に出版されたシェイクスピア作品の翻訳序文をいくつか取り上げる<sup>4</sup>。次に、序文とその時代の英文学研究状況とを比較考察し、英文学翻訳とその多くを担ってきた英文学研究との並行性の有無を明らかにする。さらに、この英文学翻訳と英文学研究についての考察を、それらを包含する当時の社会思潮との関連の中に位置づけていく。以上の考察に当たり、既に吉武(1968: 214-215)やKondo and Wakabayashi(1998: 489)が明治の翻訳の転換点と指摘している『<sup>ひいしだん</sup>繁思談』緒言や森田思軒「翻訳の心得」が世に出された明治18~21年を境として、明治を前期と後期に区分して通時的に考察していく。

本論は、翻訳研究(Translation Studies)の研究分野に即して言えば、記述的翻訳研究(Descriptive Translation Studies – DTS)の立場からの考察である(Toury, 1995: 7-22)。また、翻訳テキストと翻訳を規定する外的・社会的コンテキストとの関係が本稿の研究課題である以上、研究の枠組みとしてTouryがDTSとの関連を重視した翻訳規範(translation norms)の概念を念頭に置いている(Toury, 1995: 53-55)<sup>5</sup>。ただし、Toury(1995: 56-69)やChesterman(1997: 51-85)が提示した具体的な翻訳規範をそのまま本論に応用できるかどうかは必ずしも検証しておらず、またその検証が本論の目的ではないため、本稿では彼らの用語は用いずに考察を進めることとする。

翻訳テキストと外的・社会的コンテキストの関係が本論の研究課題であると先に述べたが、明治期の日本において翻訳が社会的コンテキストと密接に関連していたのは、もちろん英文学の翻訳に限ったことではない。例えばデュマの翻訳や中江兆民の手になる『民約論』(ルソー『社会契約論』の翻訳)といったフランス文学・思想の翻訳は、明治の一大思潮の1つである自由民権思想を牽引する役割を果たしていた(柳田1961: 26-30, 179-184)。また、二葉亭四迷によるツルゲーネフの翻訳は、言文一致体とその後の日本文学形成に及ぼした影響など、主として文学の観点から論じられてきたが、その出発点は欧米列強と同等の帝国主義を進める上で利害関係にあるロシアを理解する必要性にあった(小森1997: 280-285)。これらの翻訳も社会文化的コンテキストと翻訳の関係を示す上では重要な考察対象に違いない。しかし本稿では英文学翻訳と英文学研究の関連という視点に絞り、翻訳と社会的コンテキストという広範な考察の論点を限定することとした。

## 2. 明治前期の英文学翻訳

### 2. 1 『葉武列土』

まず、前述した明治8年の仮名垣魯文訳『葉武列土』序文から分析する。この翻訳は厳密には翻訳というよりは *Hamlet* を題材とした翻案と呼ぶべきもので、魯文が創刊と記事の執筆に携わっていた平仮名絵入新聞に連載された。明治のシェイクスピア翻訳としてはこれが最初の試みになるが、残念ながらこの連載は「不評」のため僅か3回で打ち切りになる。この時の経緯を、11年後の明治19年に再び *Hamlet* を翻訳した『葉武列土 倭錦絵』の「序」において、魯文は次のように述べている。

そのころ かんきやくいまい せいようしやうせつ びいある あじわもの やみくも おもろ  
當時の看客未だ西洋小説の微意有を味ふ者なく、闇雲に面白からずとして頗  
る不評なりしかば、斷然續稿を廢し次号の記載を見合し・・・

[句読点は筆者による] 6

ここでまず指摘できることは、明治初の英文学作品の翻訳が、江戸の伝統的な庶民の娯楽を担ってきた戯作者である魯文によって、戯作同様に大衆の読者を対象にして行われた、ということである。前田愛によれば、政論を中心記事とした明治初期の大新聞はフリガナのない漢文調で書かれていたため、大衆が読者として想定されず疎外されていた。それに対して『葉武列土』を連載した平仮名絵入新聞はその名の通り仮名を用いた平易な文章だったため、大衆に親しまれていた(前田 1973: 148-149)。魯文はこの翻訳に先立つ『安愚楽鍋』(明4)において、大衆までもが「文明開化」に感化される風潮を描いていたが<sup>7</sup>、そのような大衆を見ていた魯文には、文芸の世界においても西欧の作品によって大衆を「開化」しようという意図があったのではないだろうか。*Hamlet* は英文学のキャノン、つまりイギリスの代表的な文学作品としての確固たる地位を与えられてきた作品である。このような作品を日本の大衆の読者に提供しようとする魯文の翻訳の試みは、急激な欧米化が明治維新後の日本を席卷していた当時の文学状況にとって、極めて画期的かつ時流を読んだものであるはずだった。

しかし、先に引用した「序」に書かれている通り、対象とした大衆の読者には「西洋小説の微意有を味ふ者なく」、この魯文の試みは失敗に終わってしまう。それはいかなる理由によるのだろうか。ここで、当時の英文学研究と社会思潮との関連から、その理由を考察する。

明治8年という年は、前述の通り、東京開成学校(東京帝国大学の前身)で外国人講師サマーズによって初めて英文学講義が行われた年である(川戸 2004: 89-93)。この時、シェイクスピアやミルトンといった英文学のキャノンと考えられる作品が講義されていたことが知られている。初めて英文学が紹介された段階にあって、日本では

当然英文学の研究は存在してもしなかった。しかし着目すべきは、東京開成学校という国策としてのエリート養成機関において、その後毎年シェイクスピアをはじめとする英文学のキャンノンについての講義が提供されたということと、そこから坪内逍遙ら英文学研究の先達が育っていくような、英文学研究発展の萌芽があったということである。つまり、英文学は国策としてのエリート知識人養成の中に制度的に位置づけられ、その後の英文学研究の制度的発展の礎を築くことになるのである。この点で既に、英文学の位置づけと、大衆の読者への英文学提供を目指した魯文の意図とは乖離していたということができる。

さらに当時の社会思潮との関連を考察すると、この乖離がより鮮明に見えてくる。明治6年、欧化政策の推進によって内治を目指す側と対外強硬的に征韓を目指す側が対立した結果、前者が政治の実権を握り、後者は下野することになった（明治6年の政変）。これにより欧化政策がますます推進されたことは疑いがない。例えば国のエリート養成についても、明治2年に設置された漢学系・洋学系の2つの教育機関が明治6年に洋学系1つに絞られ、ここに英・仏・独語を用いる東京開成学校が開校する。さらに、明治8年には開成学校での教授言語が英語のみになる<sup>8</sup>。サマーズによって英文学が講義された背景にはこのような政府の欧化政策の強化、特に英語への傾倒があったと考えられる。一方、政変で敗北した側は、例えば板垣退助が大衆の現状改善のために民権拡大を標榜して立志社を結成、明治7年には民撰議院設立建白書を上申する。これが後の自由民権運動に発展することを考えれば、明治6～8年当時、欧化政策は大衆の現状の「開化」には至っておらず、欧化政策を邁進させる国家のエリート達と大衆の間には『安愚楽鍋』に描かれたような欧化・文明開化を無条件に受容する意識の共有はなかったことが窺われる。このことは、明治7年に流行した「文明開化と口では云へど、染みた固陋がのみ難い<sup>9</sup>」という歌からも読み取れる。

つまり、当時の社会状況として、国策としてのエリート養成の中に組み入れられている英文学と大衆が置かれている状況の乖離があったと考えられる。大衆の娯楽として英文学を提供しようという魯文の試みが成功しなかったのは、単に「当時の看客未だ西洋小説の微意有を味ふ者なく」という大衆の読者が未成熟な状況のためだけでなく、読者と英文学の置かれた状況の乖離が1つの要因だと考えることができる。

しかしながら、ここで指摘しておきたいのは、魯文が大衆の読者の娯楽を主眼に置いて翻訳したにもかかわらず、その読者からの評価を得られなかったという事実がその後の翻訳の1つの方向性を示すことにつながったということである。次にこの方向性について考察していく。

## 2. 2 『葉武列士倭錦絵』、『何桜彼桜銭世中』、『自由太刀餘波鋭鋒』

明治19年に魯文は東京絵入新聞（平仮名絵入新聞から改称）に *Hamlet* を改訳し

た『葉武列土 倭錦絵』(以下『倭錦絵』)を連載開始し、今回は結末まで連載が続いた。連載の予告には次のように書かれている。

文章ハ繰曲浄るりの院本調に倣ひ、近松門左衛門が句調、福内鬼外の洒落に則り、記者が怪筆に譯述する・・・ [句読点は筆者による] 10

その2日後に翻訳文の連載が始まるが、本文に先だって次のように書かれている。

[*Hamlet* の翻訳『葉武列土』を] 當繪入新聞第七二号(明治八年)九月七日の紙面より同九日十日と第三回まで其筋書を記載せしが、未だ時好に適はすして先王の幽霊と共に立消せしも疾十二年の昔と成行、看客も定めし御忘却ならんとは思ひ侍れど、去りとては重複のおそれあり、故に今回は其文体を一變し・・・浄瑠璃院本の鬘に倣い・・・ [句読点は筆者による] 11

実際に『葉武列土』と『倭錦絵』では翻訳のストラテジーは異なっている。両者の比較考察は既に川戸が論じているので(川戸 2004: 15-19)、ここでは両者の違いを簡潔に記しておく。読者に不評であった『葉武列土』の体裁は筋書体<sup>12</sup>で、登場人物の名前も原文の音に漢字を当てて訳されている。一方『倭錦絵』の方は、体裁が筋書体から院本調に変更され、日本の伝統的な娯楽作品として読者に提供する意図が明確に示されている。人物の名前も日本風に変更され(例えば *Hamlet* が「葉叢丸」と称される)、台詞の七五調も前作より強調されている。まさに歌舞伎や浄瑠璃を彷彿とさせる美辞麗句も増え、徹底した日本化/自国語化(domestication<sup>13</sup>)のストラテジーが採られている。

明治8年に連載が打ち切られた時は、読者が「微意味ふ」ことができぬような「時好に適は」ない状況であったが、この改訳に際しては、10年以上を経て今こそ自らの翻訳が成功する時期であるという期待を魯文が抱いていたことが窺える。換言すれば、10年以上を経て改訳を世に問うということは、この当時の読者が「微意味ふ」ことができる、尚かつこの改訳が「時好に適」っていることを、魯文が認識していたからに他ならないだろう。この意味で、明治8年の「不評」を出発点にして、前回以上に大衆の読者を意識した結果、徹底した日本化という翻訳ストラテジーを取ったと考えられるのである。

このような徹底した日本化/自国語化を行う翻訳ストラテジーはこの当時珍しいものではなかった。『倭錦絵』の前年に大阪朝日新聞に連載され、同じく19年に出版された宇田川文海による *The Merchant of Venice* の翻訳『何桜彼桜 錢世中』(以下、『何桜』)も、『倭錦絵』と酷似した翻訳ストラテジーが採られている。『何桜』に付き

れた訳者の「自序」には以下のように述べられている。

精神は沙翁に奪ひ文章は柳亭に假り心體共に故人の糟粕を管めたるものなる<sup>14</sup>

この翻訳には、題字にも「趣向は沙士比阿の肉一斤<sup>15</sup> 文章は柳亭種彦の正本製<sup>16</sup>」(ふりがなは原文通り)と掲げられ、江戸の戯作を踏襲して大衆に娯楽を提供しようとする意図が明確に示されている。内容は *The Merchant of Venice* でありながら、正本仕立てに翻訳され、舞台はヴェニスから江戸に、固有名詞は全て日本名に、挿し絵は完全に江戸の武家・町人の姿を描いており、『倭錦絵』と同様の徹底した日本化／自国語化が行われている。さらに「自序」には『何桜』は実際に上演され「喝采を博し」たと述べられている。川戸(2004: 166-7)によれば、観客であった関根黙庵は次のように感想を述べている。

[この脚本は] 舶来種とは思へぬ位 [中略] 筋がよく通って面白い [中略] 兎に角日本の『ヴェニスの商人』として、非常に感興を起させた芝居であった。

この文章からは、西洋の戯曲を完全に日本の芝居に作り替え、日本人向けの娯楽としての『ヴェニスの商人』になっていることが『何桜』の好評の理由であることがわかる。この点で、『何桜』と同様の翻訳ストラテジーを採っている『倭錦絵』も当時の大衆の読者に好意的に受け入れられただろうと推測できる。

同時代の翻訳序文をもう1つ見ておきたい。明治17年に坪内逍遙の手になる *Julius Caesar* の翻訳『自由太刀餘波鋭鋒』(以下、『自由太刀』)の「附言」である。逍遙は「附言」の中で、自らの翻訳態度を次のように語っている。

原本は [中略] [日本の] 院本とは全く體裁を異にしたる者なるを、今此國の人の為にわざと院本體に譯せしかば、原本と比べ見ば或は不都合の廉多あるべし、見ん人これを諒せよ。全文意味の通し易きを專要とし、淨留理にてそめ易き所は之にしたがひ、臺辭にして解し易き所も又之に従ふ。蓋し原本乃意を失はざらんを力むるのみ。[中略] 原本の意は成るべく失はざらんを力むるといへども、中には彼我思想の異なるままにいかやうにも譯しかたき條なきにあらず、それらは譯者の意匠をもてことさらに取捨しまたは骨を換へたるもあり・・・ [句読点は筆者による]<sup>17</sup>

逍遙の翻訳態度は極めて明快である。第1に、逍遙が考える日本人にとっての戯曲形式とは院本であり、日本人読者がわかりやすいように西洋の戯曲の形式ではなく日本の形式を採用している。第2に、逍遙は意味が分かりやすいことと、原文の内容を

失わないことを重視している。院本の形式に倣ったことや、「彼我思想の異なるままにいかやうにも譯しかたき條なきにあらず、それらは譯者の意匠をもてことさらに取捨し又は骨を換へたるもあり」という態度は、宇田川や魯文のそれと酷似している。

川戸はこの翻訳態度の酷似について、魯文が新進気鋭の文学者逍遙の翻訳を参考にすることによって以前は中絶した『葉武列土』の改作を試みたのだと論じている（川戸 2004: 16-26）。しかし、翻訳ストラテジーが酷似した要因はそれだけだろうか。

逍遙は後にシェイクスピア全作品の翻訳を試みたシェイクスピア研究者の先駆けである。遡って明治 10 年、逍遙が在籍していた東京開成学校は東京大学と改称され、同大の英語教師サマーズの後任としてホートンが英文学の講義を行った。彼の講義はシェイクスピアの作品解釈や劇中人物の性格解釈といった緻密な読解を求める本格的なものであり<sup>18</sup>、逍遙は彼の英文学講義を受けたエリート知識人のひとりであった。ホートンは明治 10 年から 15 年まで東京大学で教壇に立ち、前任者のサマーズもその間札幌農学校をはじめとする地方の学校でシェイクスピアを講じた。つまり、いわゆる制度としての高等教育の中でエリート達にシェイクスピアをはじめとする英文学が講義され、その制度的な英文学教育の中で逍遙は学んでいたのである。逍遙は卒業後、明治 15 年に東京専門学校（後の早稲田大学）で英文学を教え始めた。明治 19 年に東京大学は東京帝国大学と改称され、20 年にはその文科大学に英文科が設立され、名実ともに「英文学研究」が出発点を迎える。23 年には逍遙が東京専門学校の文学科設立の中心人物となる。こうして、逍遙は英文学が研究として確立し始める 10 年あまりの間に、原文を正確に深く解釈する態度を学んで研究者としての初期の経歴を積む。

このように学究的かつ制度的な研究の内部にいる逍遙は、魯文や宇田川とは全く異なる立場から翻訳を行っているはずである。この立場の違いにもかかわらず、彼らが全て同様に極端な日本化／自国語化の翻訳ストラテジーを採ったことには、いかなる社会思潮が背景にあったのだろうか。

明治 8 年にはまだ大衆の読者が「西洋小説の微意有を味ふ」ような状況ではなかったが、11 年以降、リットンやディズレイリの政治小説が相次いで翻訳され、明治 20 年頃まで一種の翻訳小説ブームがあったことが既に吉武（1968: 213-215）や Kondo and Wakabayashi (1998: 489)によって指摘されている。吉武によると、この時期の翻訳は日本の読者にわかりやすいように大胆な翻案や自由訳（吉武は「濫訳」と呼んでいる）が大方であった。逍遙はこの流れの中で『自由太刀』以外にもスコットやリットンの小説の自由訳を、学生時代の明治 13 年と卒業後の 17 年に出版している（吉武 前掲書: 213）。

伊藤整(1953: 204-205)は、当時の政治小説の翻訳の多くが漢文読み下し体で書かれた結果、その読者の多くは漢文の教養を持つエリート知識人達だったと論じている。当時の若いエリート達は欧化政策を進める政治の世界での立身出世が約束された存在であり、西洋の政治思想を知ることがを渴望していた。そのため、例え原作を換骨奪胎



した翻訳であっても、西洋の思想が書かれている政治小説の翻訳・翻案が流行したと伊藤は説明している。

しかし、西欧の政治小説のエッセンスを渴望していたのは若いエリート達だけではなく、大衆も政治小説の翻訳を広く受容していたと考えられる。前田愛によれば、明治10年代には自由民権思想の普及と共に大衆も社会・政治に関心を持つようになり、西洋で発展した新たな思想に対する知的好奇心が高まったという状況があった。その中で、市井の青年達が政治思想書の勉強会・講読会を積極的に開催し、難解な思想書が読めるまでになっていた（前田 前掲書: 153-158）。このような青年達が、エリート達同様に政治小説翻訳の流行の一端を担っていたはずである。

つまり、この明治10年代に、国家のエリート達と大衆の翻訳を通じた西洋思想（必ずしも英文学の政治小説からだけではなく）の需要が共通したものとなる。換言すれば、国家のエリートと大衆の読者の間で英文学の位置づけが乖離していた明治8年前後の状況がこの時期にはある程度解消され、エリートか大衆かを問わず、社会全体として西洋思想を受容するための翻訳受容が活発化したと考えられる。こうして、エリート知識人としての逍遙と、大衆の立場に近い戯作者としての魯文や宇田川がともにシェイクスピアの翻訳を提供できる土壌が整っていたのである。

さらに、彼らが院本体を用いた極端な日本化／自国語化の翻訳ストラテジーを採った背景も、この時代の状況から説明することができる。知識人階級と大衆がともに翻訳によって西洋思想を知る土壌が整ったといっても、それは大衆の読者が漢文読み下し体の翻訳ばかりに傾倒したということではない。明治15、6年頃までは主に戯作小説を市民に提供していた貸本屋は依然として存在していたし（前田 前掲書: 150-151）、明治18年に評判となった逍遙の『当世書生気質』は戯作の流れを汲んでいた（鈴木1998: 198-201）。宇田川や魯文は戯作者・ジャーナリストであり、戯作の伝統に則って明らかに大衆の娯楽を目的としている。そのため、先に考察したように、明治8年に拒否されたストラテジーとは異なる新たなやり方で読者を満足させる方法が考えられた。つまり、明治19年の宇田川や魯文の翻訳は、読者が理解しやすく受容しやすい身近な院本体を用いた翻訳ストラテジーによって娯楽を提供することを重視したと考えられる。

一方、逍遙は研究者として学んだ英文学を世間に広めるだけではなく、自由民権思想を背景とした政治小説翻訳の流行に反応して政治的主題を持つ *Julius Caesar* を翻訳したはずであり、その意味では戯作文学の伝統に沿った魯文や宇田川とは異なる。しかし、上述したように、政治小説の翻訳は知識階級だけではなく大衆もその対象読者となっていた。そのため、「附言」に言及されていた通り、当然読者の理解しやすさや嗜好、娯楽性を翻訳ストラテジーの決定要素として考慮せざるを得ない。

つまり、当時の学究的な英文学の立場からの逍遙であっても、戯作者・ジャーナリストとして市民の娯楽性を重視した魯文らであっても、大衆の読者にとっての英文学

の受容しやすさを踏まえた翻訳を行うのは当然である。換言すれば、英文学研究がこの当時胎動してきたことは間違いがないが、英文学翻訳はそれによって牽引されたのではなく、むしろ大衆の娯楽性や嗜好に牽引された画一的な翻訳状況の時期だったのかもしれない。

### 2. 3 転換点としての『繫思談』緒言、森田思軒『翻訳の心得』

このように大衆の読者のための自由訳が支配的な翻訳となっていた明治 18 年、画一的に見える翻訳状況に変化が現れる。リットンの *Kenelm Chillingly* の翻訳『繫思談』の緒言で初めて、原文の内容を取り入れることだけを重視した換骨奪胎の翻訳が中心だったこれまでの自由訳が批判され、逐語訳の重要性が主張される。

稗史ハ文ノ美術ニ属セルモノナルガ故ニ、構案ト文辞ト相俟テ其妙ヲ見ルベキモノナルコトヲ論ヲ待タザルニ、世ノ訳家多クハ其構案ノミヲ取りテ、之ヲ表發スルノ文辞ニ於テハ絶テ心ヲ用キルコトナク、全ク原文ノ真相ヲ失フモ肯テ顧ミザル〔中略〕訳者竊ニ茲ニ慨スルコトアリ、相謀テ一種ノ訳文体ヲ創意シ、語格ノ許サン限りハ努メテ原文ノ形貌面目ヲ存センコトヲ期シ、コレガ為メニハ瑣末ニ涉レル邦文ノ法度ノ如キハ寧ロ之ヲ破ルモ肯テ顧ミル所ニ非ズ、精緻ノ思想ヲ敘述スルニ方リ往々已ムベカラザルモノアレバナリ

[ふりがな、句読点は筆者による] 19

このように自由訳が強く批判されても、その後も明治 19 年出版の『倭錦絵』『何桜』をはじめとする大胆な自由訳がなくなるわけではない。しかし、少なくともこの「緒言」によって、自由訳一辺倒の画一的な翻訳状況に風穴が開けられたのである。学究的なものもそうでないものも、画一的な翻訳しかしない状況では翻訳の状況は進化しない。その点で、この緒言は非常に重要な転換点になったのである<sup>20</sup>。

『繫思談』と同様の有名な翻訳論が、明治 21 年発表の森田思軒「翻訳の心得」である。思軒はいわゆる「精密訳」と呼ばれる翻訳態度を主張する。

原文に「心ニ印ス」とあらは直ちに「心ニ印ス」と翻譯し渡し。其事<sup>あたか</sup>恰も「肝ニ銘ス」と相符すればとて、「肝ニ銘ス」とは翻譯す可からず。原文の儘<sup>まま</sup>「心ニ印ス」と書かば、<sup>ただ</sup>啻た原文の「肝ニ銘ス」の事<sup>つた</sup>を傳ゆるのみならず、西洋人は我の「肝ニ銘ス」の場合に於ては「心ニ印ス」と言ふなりと其の意趣をも傳へ得るなり。

[ふりがな、句読点は筆者による] 21

思軒の主張で重要な点は、西洋人が有る事柄について言うその言い方までも日本人

の読者に忠実に示すべきだという考え方で、『繫思談』に書かれた翻訳論を踏襲したものである。思軒は慶応義塾大阪分校を卒業したジャーナリストであり、英文学研究に造詣の深い人物ではない。しかし、ジャーナリストだけではなく様々な小説を翻訳して「翻訳王」と呼ばれた知識人である。その森田がこのような忠実な逐語訳を明確に主張したとあれば、その影響力はかなりのものだったと推測される。

では、自由訳一辺倒であった当時の翻訳状況に、このような問題提起がなされた背景とはどのようなものだったのか。ここでも英文学研究と社会思潮との関係を考察したい。明治 20 年、東京帝国大学に英文科が設立される。これによって、国策としての高等教育の中に高度な英文学研究が明確に位置づけられることとなる。その後も 21 年に国民英学会、23 年に東京専門学校に英文科設置と、次々に高等教育機関で英文学の研究が始まっていく。このように研究体制が徐々にではあるが整ってくることによって、原文を丁寧に理解する研究姿勢が次第に確立したと考えられる。後述するが、明治 34 年には研究叢書の出版が盛んに行われるようになるのだが、そのような精緻な研究姿勢の萌芽がこの時期に見られる。英文学翻訳においても原作を忠実に理解・再現することの必要性が感じられ始めたのではなかろうか。

他方、社会全般においても、文学や演劇に対して単なる娯楽性だけではない高度な関心が世間に広まりつつあったようである。明治 19 年には新聞紙上に小説改良を望む投書（時事新報 7 月 7 日）<sup>22</sup>や演劇改良会の発足記事（同 8 月 5 日）<sup>23</sup>が掲載されている。また、シェイクスピアの *Julius Caesar* を題材とした「ドラマ輪読会」が第一高等中学（東京帝大の予備門が前身）で開催されたことが報じられ、その記事の中で、このような輪読会は「英語研究上に必要」と評されている（東京日々新聞 10 月 26 日）<sup>24</sup>。こういった文学・演劇をめぐる傾向は、単なる西洋の受容に留まらず、そこから日本の文学・演劇を改良すべきという思潮を示していると考えられる。日本人読者・観衆の現状を踏まえて日本化することで西洋を受容するという選択が支配的であった状況に、日本化せずに正確に西洋の文学・演劇を理解し自らの改良を促そうという、西欧文化移入の新たな方向性が示されている。『繫思談』や「翻訳の心得」に言及されている翻訳の思想もこの方向性と一致するものであり、上述した英文学研究の方向性の確立同様に、社会思潮もまた当時の翻訳観形成に密接に関連しているのである。

ここで、明治前半の英文学翻訳状況についてまとめておきたい。

仮名垣魯文によって初めてシェイクスピアの翻訳がなされた明治 8 年当時、英文学の位置づけと魯文が対象とした読者の位置づけには乖離が見られ、英文学の翻訳が読者に受け入れられる状況にはなかった。しかし、魯文が改訳を発表した 10 年後には社会の状況も変化し、英文学と魯文が対象とした読者との乖離もある程度解消され、徹底した日本化戦略と日本人読者のための娯楽を志向した英文学の受容が成功を収める状況になっていた。坪内逍遙も始まったばかりの英文学研究の立場から翻

訳を試みたが、彼の翻訳もまた魯文の『倭錦絵』や宇田川文海の『何桜』同様に日本人読者の嗜好や娯楽性を重視した日本化ストラテジーを採用していた。つまり、明治前期の英文学翻訳と英文学研究の関係は、本稿の冒頭で提示した仮説とは異なり、英文学研究が英文学翻訳を規定したのではなくむしろ大衆の読者や社会の流行が英文学翻訳のあり方を規定していたと考えられるのである。本稿のもう1つの仮説である英文学翻訳と社会思潮の関係については、国策としての欧化政策と大衆の現実としての自由民権運動といった大きな社会思潮の流れが英文学翻訳のあり方に影響力を持っていた、ということが確認できるであろう。

また、明治18年の『繫思談』、21年の「翻訳の心得」が上記の状況からの転換点といえることが先行研究で既に指摘されていたが、本稿でもこの2つに言及された翻訳観が、それまでの画一的な翻訳状況に新たな方向性を提示したことを再度確認しておきたい。さらに、この転換点もまた、英文学研究の制度的確立や社会思潮の流れと無関係ではない。

### 3. 明治後期の英文学翻訳

#### 3. 1 『人肉質入裁判法廷之場講義録』

『繫思談』と「翻訳の心得」によって1つの転換点を経た翻訳状況は、その後どのように発展していくことになるのだろうか。

ここまで『何桜』や『倭錦絵』といったシェイクスピアの翻訳序文を概観したので、ここでもまず *The Merchant of Venice* の翻訳の1つである明治24年の『人肉質入裁判法廷之場講義録』(以下、『講義録』)の「緒言」を考察する。この翻訳は有名な裁判の場面のみを採り上げてその英語原文と日本語訳を掲載し、さらに注釈を付したものである。訳者は国民英学会主幹の磯辺弥一郎である。国民英学会は実用英語と英文学を教える目的で明治21年に磯辺によって創設された私立の英語学校で、東京帝大や慶應義塾と並び称されるほどに日本の英学の発展にとって重要な学校だったようである<sup>25</sup>。

「緒言」の一部を以下に引用する。

- 一、 近来英文學ノ我國ニ行ハルルニ至リシハ實ニ國家ノ為メニ祝スベキナリ。蓋シ英文學ハ英人ノ高尚純潔ナル思想ノ凝結シタルモノナレバ、我邦人ガ之ヲ翫味スル中ニハ知ラズ識ラズ其高尚純潔ナル思想ニ感化セラレ、古来未ダ曾テ東洋ニ見ザルガ如キ新文學我蜻蜒洲 [i.e. 日本] に煥發スルニ至ラン。我國民英學會夙ニ此ニ見ルアリ、文學科ノ設アリテ英文學ヲ教授シ、[中略] 以テ高尚純潔ナル新文學隆興ノ一助タラシムルヲ期セリ。[中略] 本書ヲ發行シ以テ宿昔ノ志タル英文學講義録の先鋒トシタルハ、主トシテ

是等 [ i.e. 学校に通って学ぶことのできない ] 青年ノ裨益ヲ計リ其獨學ノ用ニ供センガ為メナリ。

- 一. [前略] 古来英文學中ノ最モ秀逸ナルモノヲ精選シタル書多ク世ニ行ハル。  
就中米國スウキントン氏ノ「スタデキース、イン、イングリツシユ、リテラチュアル」ハ最近ノ編纂ニ係ハリ、[中略] 此書ニ収メタル金玉ヲ熟讀翫味セバ、英文學ノ一班ヲ窺フニ於テ遺憾ナカラシ [後略]
- 一. シエクスピヤ氏ノ院本ハ總シテ難句難章ニ富ミ、從ツテ其解釋法モ古来學者間ニ一定セズ、[中略] 此一篇ヲ講述スルニ當リ最モ多ク採用シタルハロルフ氏ハンター氏デイトン氏等ノ註釋ナリ。[中略] 我邦ニ於テ英文學ノ大家ヲ以テ五指中ニ屈セラルル第一高等中学校教授井上十吉氏ガ特ニ予ノ為ニ本書校閱ノ勞ヲ取ラレシ [後略] [下線訳者]
- 一. 本書ハ [中略] 一讀シテ意義ノ釋然解通スルヲ眼目トシ、[中略] 要唯ダ原文ヲ有リノ儘ニ寫シ、勉メテ其文勢語勢ヲ失ハザルニ在リ。[後略]  
[ふりがな、句読点は筆者による] 26

この「緒言」には3点の特徴が読み取れる。第1に、英文学が国家のためになるという明確な意識である。加えて、英文学翻訳は教育制度に組み込まれていない独学の学生にも英文学の高尚な思想を理解させる手段でもある。つまり、磯辺にとっての翻訳は、国家や制度と密接に関わっているのである。

第2に、英文学研究の制度的な形成の中に翻訳が組み込まれていることである。英米の研究成果を数多く参照して原文の理解に努め、なおかつ英文学のキャノンと認められている作品の受容を促すというのは、現在から見れば典型的な英文学の研究姿勢を表している。また、日本の著名な専門家の名前を冠しているのも、この研究の権威を高めるといって極めて制度的な方法と言える。

第3に、その研究姿勢と共鳴する、原文に書かれているままに理解することを目的とする翻訳態度である。これは、『繫思談』や「翻訳の心得」に書かれた翻訳観を受け継ぐ態度でもある。

では、以上のような翻訳観・英文学観はいかなる背景を持って書かれたものなのだろうか。英文学研究の面から見ると、既に述べた通り、明治20年以降、東京帝大、国民英学会、東京専門学校といった英文学を教授する教育機関が次々に設立されたが、その後も28年東京高等師範英語科、29年正則英語学校、30年東京外国語学校英語科と、教育・研究機関は増加し、英文学研究がますます制度的に確立していく。この研究の確立は、転換期と考えられる明治18~21年について前章で考察したように、日本化させて受容するよりも英文学を正確に理解することによって日本を進化させようとする態度と合致する。磯辺の「緒言」に書かれているのは、まさに英文学に対するこの態度を体現した研究姿勢であり、この研究姿勢から生まれた翻訳観である。

さらに、この翻訳観及び研究姿勢は当時の社会思潮を反映したのもでもある。例えば、明治 22 年、郵便報知新聞に当時の外交政策の懸案事項であった条約改正の遅れに関連した記事が掲載された。その記事には、条約改正に関して常に紛擾するのは「日本は最早智力に於ても又兵力に於ても一躍直ちに各国と對等の地位に立つべきものなりとするの徒」であって、その中には「假令僅少の人は西洋文明の風に化せりと雖も尚ほ國民の多數は其の意志感情に於て更らに昔時に比して進化する所あらず」という立場が見られる、と述べられている（郵便報知新聞 10 月 31 日 ふりがなは筆者による）<sup>27</sup>。条約改正についてはその後、早く実現すべきという「紛擾」の世論が増えていくのであるが、この記事の内容が示すのは、日本が列強と対等になることを重視する姿勢と、そのためには旧体制的な意志感情だけでは国の「進化」は望めないのだから西洋文明を自らのものとしていかねばならない、という思想である。この欧化推奨の思想は、磯辺が「緒言」で述べた高尚純潔たる英文学の思想を知るところを目的とする翻訳態度と重なり合う。

西洋文明を深く知ることで自らを進歩させようという世論はこればかりではない。例えば、明治 23 年に発せられた教育勅語をめぐる新聞記事にも、日本が西洋を深く知り、それと共に国民独自の資格を考える時機に至っていると述べられている（東京日々新聞 11 月 3 日）<sup>28</sup>。この記事は、教育勅語が儒教的な価値観を重視したことを評価するという点では欧化推奨と相反する思想を示しているが、西洋文明といかに対峙し自らに生かしていくかが意識されていたという点では『講義録』に示された姿勢と根本的には共通点がある。また、『講義録』出版後の明治 27 年には東京帝国大学文学部を中心とした「帝國文學會」が発会し、翌年には機関誌『帝國文学』が発行されるが、讀売新聞に掲載されたその発行予告記事には次の 1 文が書かれている。

文學の方針を指掌し、徒に古に泥む者の懶眠を破り、徒に新を趁ふ者の迷夢を覺し、一に文學社會の木鐸となりて、日本文學の發達を圖り、國民文學の基礎を牢くして以て日本の國光を輝かさんこと期するものなり。

[ふりがなは筆者による]<sup>29</sup>

「徒に古に泥む者の懶眠を破り」「徒に新を趁ふ者の迷夢を覺し」という文章はまさに、旧体制の思考に拘泥せず、かつ西洋の新思想を闇雲に受容するだけではなく明確な方向性を持つべきであって、それが「日本の國光を輝かさんこと」につながるといふ、文学の進むべき方向性を示している。これは上述した当時の社会思潮と英文学研究姿勢から導かれた思想と考えられ、「緒言」の内容とも共通する。

このように、『講義録』の「緒言」は当時確立し始めた英文学研究の内部からの態度表明であり、さらにその研究・翻訳態度も当時の社会思潮と分かち難く結びついているのである。つまり、英文学とその翻訳は、明治後半になって、西洋を深く知ること

によって自らを進化させていくという国家発展のためのイデオロギーを再生産する役割を担い始めたということができるのである。

### 3. 2 『ゼ、マーチャント、オブ、ヴェニス』

次に、同じ *The Merchant of Venice* からの日本語訳の序文を 2 つ見ていくことにする。まず、明治 24 年の『講義録』から少々時間をおいてしまうが、36 年に土肥春曙による翻訳『ゼ、マーチャント、オブ、ヴェニス』(以下、『マーチャント』)がある。これも有名な法廷の場のみ訳であり、当時大人気の芝居一座であった川上音二郎一座の上演のために書かれている。翻訳者の土肥は東京専門学校文学科の第 1 期生であり、制度として発展してきた英文学研究の内部で学問的教育を受けた人物である。

『マーチャント』の「はしがき」には次のように書かれている。

人物の名稱、出入、問答の順序などを、殆んど原作の儘に随ひたるほかは、事件は我國の今日の人情に嵌まるやう、臺詞は耳遠い直譯振にならぬやう、素人にも演じ易きやう、一般の人にも聞いて早分りのするやう、處々省略若しくは敷衍して、泰西の趣味を東洋化し、彼れの金石を我が瓦礫となしたる罪大なり。 [ふりがなは筆者による] 30

土肥の翻訳は磯辺のそれが研究成果としての性格を強調としていたのとは全く異なり、娯楽である演劇を目的とした翻訳である。この「はしがき」には演劇上の効果や観客の理解のために作品を日本化するという翻訳戦略が明記されており、明治 20 年以前の自由訳の流れを踏襲しているように見える。しかし土肥は同時にこの戦略が「罪大」なるものだとも認めている。つまり、翻訳によって英文学の「金石」を日本化するべきではないということが認識されているのである。ここには正確な理解・鑑賞を目的とする研究と、役者や観客を顧慮すべき芝居の実践との間にある翻訳のジレンマが示されている。

土肥のこの翻訳上のジレンマは、当時の英文学研究の状況とももちろん無関係ではないだろう。明治 20 年以降、英文学を教授する高等教育機関が次々と設立されたことは既に述べたが、教育機関の設立だけではなく、その研究内容も次第に充実していく。例えば、明治 34 年の文学状況を概観した評論が大阪毎日新聞に掲載されたが、この 34 年は「浩瀚な叢書類の豫約出版の盛に行はれたる。・・・多量に好翻譯が刊行せられたる。・・・坪内先生に依りて始めて、信憑すべき『英文學史』の與へられたるは此の年なり」と評されている(大阪毎日新聞 明 35 年 1 月 1 日 ふりがなは筆者による) 31。この評論記事からは、日本で研究叢書や英文学史が書かれるまでに英文学研究が名実ともに確立していた明治 30 年以降の状況を窺い知ることができる。

また、前節で述べたように、明治後半は社会的にも西洋の思想を移入し日本の進化を目指す意識が高かったが、社会的にも戯曲によって西洋の新思想を移入しようとする動きがあった。明治 28 年の讀売新聞には、当時の知識人達が「脚本改良會」を發足させ、その中で文相西園寺公望自ら「脚本によりて新思想を國民に涵養すべき談」を披露したことが報じられている（讀売新聞 明 28 年 2 月 17 日）<sup>32</sup>。文相自らが会に赴きこのような提案をしたとすれば、その影響力は多大なものだったと推測できる。

このように、『マーチャント』が翻訳出版された当時、訳者の土肥にとっては研究の立場から原典の「金石」を正確に訳出して読者に提供することの重要性が認識されていたはずである一方、戯曲を上演し「新思想を國民に涵養すべきこと」を考えれば、原典の省略や日本化もせざるを得ない状況だったと考えられる。ただ、このジレンマは、『倭錦絵』や『何桜』、『自由太刀』に見られたような、西欧の思想や趣向を読者・観客に伝えるためには日本風に翻案することは全く厭わないという態度とは対照的である。単に闇雲に西洋の演劇のエッセンスだけを取り入れようとする 20 年前の態度を既に脱し、上演のための利益と英文学を忠実に鑑賞するための研究上の利益とが並置されて考えられる段階にまで英文学の受容が發展していることが示されている。明治 39 年には英文学者としての経歴を積んだ坪内逍遙を中心とした文芸協会が設立されるが、文芸協会が目指したのは、まさしく両者のジレンマをなくし、真に西洋演劇を日本に根付かせることであつたはずである。『マーチャント』の「はしがき」はその意味で、当時の社会が持っていた戯曲の翻訳に対する要求と、精密な研究姿勢の發展、この両者を背景に持って翻訳が行われていたことを示しているのである。

『講義録』と『マーチャント』の翻訳序文の考察からは、明治前半と後半の 1 つの大きな違いが読み取れる。すなわち、前半における英文学翻訳は大衆の読者の反応を重視し、現状に即した娯楽の提供を目的としていたという点で、読者が英文学翻訳のあり方を規定していた部分が大きかった。それに対し、後半は英文学研究の制度・内容の發展に伴い、英文学翻訳が英文学研究内部から生産されることによって研究が英文学翻訳の方向性を牽引し始めたということができよう。もちろん、英文学研究の發展がそれを取り巻く社会思潮を反映したものであることはこれまで述べてきた通りである。

### 3. 3 明治の翻訳観を集約する浅野馮虚訳『ヴェニスの商人』の「序」

最後に、これまでの翻訳観が集約された例として、明治 39 年に浅野馮虚がシェイクスピアの原文から翻訳した『ヴェニスの商人』の「序」を考察したい。浅野馮虚は東京帝国大学英文科を卒業後、海軍機関学校の英語学教授になり、英文学研究に携わった人物である。

この「序」が極めて興味深いのは、この序文が様々な立場の人が（埋葬されている



ストラトフォードの教会から抜け出してきたシェイクスピアの亡霊までも含めて)一同に会し、この浅野の翻訳については是非を議論するという体裁を取っていることである。浅野はそれぞれの立場の人間にどのような翻訳観を語らせているのだろうか。言及されているいくつかの立場からの翻訳観を以下に要約する。

- ・英學者「翻訳の第一の要義は一字一句忠実に原作の意味を伝えることである。原文と似ても似つかない翻訳が最近流行しているが、感心しない。」
- ・英學生「翻訳というのは単なる訳文ではなく、原作を読む時の参考になるものであって欲しい」
- ・文士「英學者の意見は表面的。翻訳の最大の目的は、原文の妙味を日本語の文の上に伝えることである。形式よりは内容、字句よりは精神を重視すべき。翻訳は原文に従属するのではなく、独立的価値を持つ」
- ・小説愛読者「翻訳物のごつごつしていて読みにくく、面白くない。すらすら読めるものもいい」
- ・評論家「シェイクスピアの作品は性格描写が最大の特長であって、それをどう伝えるかが翻訳の最も肝心な部分である」
- ・翻訳者「どの意見も全て尤も。返答は五、六年待っていただきたい」<sup>33</sup>

英學者と英學生の翻訳観は、『講義録』の「緒言」に述べられていたような、明治20年以降の研究姿勢を反映した翻訳態度とほぼ一致している。評論家の意見もまた、キャンオンたる英文学作品を精緻に研究してきた結果のシェイクスピア理解と考えられ、それまでの研究成果を反映した翻訳観であると考えられる。

それに対し、文士の意見は20年以前の自由訳の立場を踏襲しているようにも見えるが、「翻訳は原文に従属するのではなく、独立的価値を持つ」という明確な意思表示はその当時には見られなかったものであり、また英學者達の意見と相反している。当時の傾向としての研究姿勢と一致する翻訳観に対して新たな方向性が示されているという点で、この翻訳観は重要な意味を持つと考えられる。

小説愛読者の意見は明治前半の大衆の読者の立場を踏襲していると考えられ、明治後半に研究姿勢によって英文学翻訳が牽引されるようになったとしても、『マーチャント』の「はしがき」に表れたジレンマのように、読者の評価が依然として英文学翻訳を規定する1つの要因であったことが窺える。

ここに見られるのは逐語訳か自由訳かの単純な二項対立の図式ではなく、ここまで本稿が論じてきた翻訳観の変化と多様化の様相である。浅野による「序」には、明治前期には大衆の読者を対象とし、尚かつ彼らの興味や流行によって規定されていた英文学翻訳が正確な理解を追求する研究姿勢に規定されるようになり、さらに明治半ばから後期に至って西洋思想の忠実な理解によって自らのあるべき姿を創り上げようと

する翻訳へと進んでいくという、明治の英文学翻訳の一連の流れが浮き彫りにされている。明治 8 年に *Hamlet* の翻訳が読者を獲得しなかったことを考えれば、その後 30 年あまりで、翻訳観がここまで多様化し、その多様性を翻訳者が並置して考察できるまでに発展したということができるだろう。

また、ここでも社会思潮との関連が示唆される。明治 27 年に日清戦争、37 年に日露戦争に勝利し、31 年には国家の念願だった列強各国との条約改正が実現される。西洋を深く知ることから日本の進む新たな道筋を考えなければならないという国家のイデオロギーと、それを受け入れる世論が形成された明治後半の社会の要求は、明治末期に至って一定の結果を示したのである。つまり、社会は西洋に追随し受容するだけの段階から、そこから日本の進むべき道を考え出し、そして列強と比肩する国家を作り出すまでに進展した。一方英文学翻訳も、単に西洋の作品を紹介すればよいとする段階から、自らを発展させるために原典を正確に理解するための翻訳、正確な理解と日本人読者の現状を改めて考え合わせる段階に進展した。この両者の進展は、時期的にも思想的にも並行していたのである。明治の英文学翻訳とそれを取り囲む英文学研究、さらにそれらを取り巻く社会思潮が互いに関連し合っていることがここでも示されるのである。

#### 4. まとめ

本稿ではここまで、明治を前半と後半に区分し、英文学翻訳と英文学研究、社会思潮がどのように関連し合ってきたのかを通時的に概観してきた。

冒頭で、常に英文学研究が英文学翻訳の方向性を規定してきたのではないかという仮説を設定したが、以上の考察から、明治前半に関しては大衆の読者の興味や流行に沿う形で翻訳がなされ、未だ萌芽の段階であった英文学研究はむしろ大衆の読者の現状に応える形で翻訳に携わっていたことが示された。しかし、その状況は明治 18~21 年の『繫思談』緒言や森田思軒「翻訳の心得」によって転換点を迎え、同時に研究体制が制度的に確立していくのに伴い、仮説の通り、研究姿勢が英文学翻訳の方向性を規定し始めたと考えられる。そして、社会思潮も英文学翻訳の方向性を規定しているとする仮説については、英文学翻訳や英文学研究を取り巻く国の欧化政策をめぐる大きな社会思潮が英文学翻訳や英文学研究の姿勢と密接に関連していることが例証された。さらに、明治期を通じ、浅野馮虚の「序」に述べられていたように、英文学研究に規定される翻訳観の確立・それに対する新たな方向性の提示・従来の読者の要求など、英文学翻訳を取り巻く要素は複雑化したが、それら全てに対峙して英文学翻訳という行為が認識されるまでに翻訳状況が発展したことも明らかになった。

今後は、実際の翻訳テキストを比較考察することによって以上の考察を詳細に検証する必要がある。また、考察を大正期以降にも拡大し、日本における英文学翻訳がど

のように規定されて現在に至っているのかも、今後明らかにしていきたい。

\*\*\*\*\*

\* 本稿は『Sauvage 北海道大学大学院国際広報メディア研究科 院生論集』第2号に掲載された研究ノート「翻訳序文に見る明治の英文学翻訳と英文学研究」に、大幅な加筆・修正を加えて書き直した論文である。

\*\*\*\*\*

#### 【註】

1 帝国大学の設立が明治における国家のイデオロギーと無関係ではないことが、鈴木(1998: 179-190)に指摘されている。

2 土井光知他監修『日本の英学 100年 明治編』p. 24.

3 それ以前にも、英文学の翻訳としては、デフォーのRobinson Crusoeの翻訳『魯敏遜漂行紀略』（安政4年／1857年）が出版されている（『日本の英学 100年 明治編』p. 211.）

4 なお、分析に用いた翻訳文献に関して、現在入手困難な翻訳テキストについては、川戸道昭・榊原貴教編『シェイクスピア翻訳文学書全集』、同『明治翻訳文学書全集』にほぼ網羅されている。本稿においても、原本が入手困難なものについてはこれらの研究集成に掲載されているものを参照した。

5 Toury は、翻訳が社会・文化的な行為であり、その社会性を説明するためには規範（norms）が中心概念となると述べている。本稿の目的は翻訳を社会・文化的なコンテクストとの関連で論じることであり、その点で翻訳規範の概念に依拠するところは大きい。

6 東京絵入新聞 明治19年10月7日（川戸道昭・榊原貴教編 2004『シェイクスピア図絵』大空社 p.171） 原文には魯文自らふりがなを振っているが、引用に際し筆者がそのふりがなを現代仮名遣いに直した。

7 『牛店雑談安愚楽鍋』（明治文学全集1 明治開化期文学集（一） pp.138-166）

8 東京開成学校開校の経緯や内容については、前掲の『日本の英学 100年 明治編』や鈴木貞美(1998)『日本の「文学」概念』、伊藤整(1953)『日本文壇史1』等に詳しい。

9 石田文四郎編『新聞雑誌に現れた明治時代文化記録集成 前編』p.129

10 東京絵入新聞 明治19年10月7日（川戸道昭・榊原貴教編 1996『明治翻訳文学全集 雑誌編2 シェイクスピア集II』大空社 p.9） 註6同様、引用に際し筆者が原文に書かれたふりがなを現代仮名遣いに直した。

11 東京絵入新聞 明治19年10月9日（同上 p.10） 註6、9同様、引用に際し筆者がふりがなを現代仮名遣いに直した。

12 これについても川戸によって説明されている(川戸 2004: 79-80)。筋書体は舞台・

人物・配役の説明、芝居の要約、ト書きが組合わされて書かれた形式で、あらすじと舞台の説明の要約になっている。一方歌舞伎・浄瑠璃の台本である院本は戯作の形式に近く、台詞やト書きが文章で書きつづられた形式になっている。

13 翻訳研究で論じられている”domestication”の日本での訳語はまだ定着していないと判断し、本稿では論旨に即して「日本化／自国語化」という用語を使用することとする。

14 『何桜彼桜銭世中』（文宝堂 1886）（川戸道昭・榊原貴教編『シェイクスピア翻訳文学書全集』第2巻所収）

15 「肉一斤」とは *The Merchant of Venice* のこと。有名な裁判の場面からこう称したのだと思われる。

16 「正本」とは歌舞伎や浄瑠璃の台本のこと。院本。

17 『自由太刀餘波鋭鋒』（東洋館 1884）（川戸・榊原編『シェイクスピア翻訳文学書全集』第1巻所収） 引用に際し、旧仮名遣いで書かれていた原文のふりがなを筆者が現代仮名遣いに直した。

18 ホートンの講義については矢野峰人(1998)『日本英文学の学統』p.i や川戸前掲書 pp.100-106 に詳しい。川戸によれば、ホートンの出題した試験問題は、ハムレットと母やオフィーリアとの関係、ポローニアスとレアティーズの性格を論じよ、など、かなり深く読解することを求めた問題だった。

19 柳田泉『明治初期翻訳文学の研究』p. 60

20 註4のくり返しになるが、『繫思談』を契機として明治の翻訳状況の変化が訪れたことは、吉武前掲書や Kondo and Wakabayashi, Ibid. において指摘されている。

21 森田思軒「翻訳の心得」『國民之友』明治20年10月21日（『根岸派文学集』所収 pp.230-1）

22 石田前掲書 pp.457-458

23 同上 pp. 458-460

24 同上 pp. 466

25 『日本の英学100年 明治編』p.424

26 『人肉質入裁判法廷場講義録』（川戸・榊原編『シェイクスピア翻訳文学書全集』第13巻所収）

27 石田文四郎『新聞雑誌に現れた明治時代文化記録集成 後編』pp.62-63

28 同上 pp.76-78

29 同上 pp.153-4（讀売新聞 明治27年12月21日）

30 『ぜ、マーチャント、オブ、ヴェニス』（川戸・榊原編『シェイクスピア翻訳文学書全集』第17巻所収）

31 石田前掲書 pp.368-72

32 同上 pp.169-70

33 『ヴェニス商人』(川戸・榊原編『シェイクスピア翻訳文学書全集』第22巻所収)

【引用文献】

Chesterman, A. (1997). *Memes of Translation*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins

Kondo, M., and Wakabayashi, J., (1998). Japanese tradition. In M. Baker (Ed.) *Encyclopedia of Translation Studies*. London: Routledge, 485-494

Toury, G. (1995). *Descriptive Translation Studies and Beyond*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins

土井光知他監修(1968)『日本の英学 100年 明治編』研究社

伊藤整(1953)『日本文壇史』講談社

石田文四郎編(1934)『新聞雑誌に現れた明治時代文化記録集成』時代文化研究会

仮名垣魯文(1872)「牛店雑談安愚楽鍋」『明治文学全集 1 明治開化期文学集(一)』筑摩書房 1966, pp.138-166

川戸道昭(2004)『明治のシェイクスピア』大空社

川戸道昭・榊原貴教編(1996)『明治翻訳文学全集新聞雑誌編 2 シェイクスピア集Ⅱ』大空社

川戸道昭・榊原貴教編(1999)『シェイクスピア翻訳文学書全集』第1、2、13、17、22巻 大空社

川戸道昭・榊原貴教編(2004)『シェイクスピア図絵』大空社

小森陽一(1997)「翻訳という実践の政治性」川本・井上編『翻訳の方法』東京大学出版会, pp.277-289

前田愛(1973/2001)『近代読者の成立』岩波書店

森田思軒(1887)「翻訳の心得」『明治文学全集 26 根岸派文学集』筑摩書房 1981, pp.230-1

鈴木貞美(1998)『日本の「文学」概念』作品社

柳田泉(1961)『明治初期翻訳文学の研究』春秋社

矢野峰人(1961)『日本英文学の学統』研究社

吉武好孝(1968)「翻訳・翻案文学」『日本の英学 100年 明治編』pp.208-227